

白選送五十一首



佐藤通雅

さとう・みちまさ 1943年、岩手県生まれ。歌集に『薄明の谷』『天心』『往還』など。評論集に『横書きの現代短歌』『岡井隆ノート』『新美南吉童話論』『詩人まど・みちお』『宮沢賢治』など。個人編集誌「路上」主宰。河北新報歌壇選者。

秋の野のまぶしき時はルノアールの「少女」の金髪の流れを思ふ

反戦映画見し夕暮は敷石の一つ一つを踏みて帰りき

軟水にバラ洗われていたりけり批判書一つ書かんあかつき

ダリア畑でダリア焼き来し弟とすれちがうとき火の匂うなり

大学の植物園を歩みつ つ 万緑父のごとくにさびし

月明り乏しき駅は幻にあらずや雁の逆しまに落つ

少年は一群の葦明け方の飢えさわやかになびきはじめつ

一国の危機に雲雀の狂い立ちあわれも血の喉笛をする

闘いへ 心問われているゆえになんじそのものごしをやめよ

菜の花を花のまま焚く火照りかなうしろに暗い少年が居る

休日の鉄棒に来て少年が尻上がりに世界に入つて行けり

『薄明の谷』

私は長い間、短歌と並行して児童文学をやってきた。新美南吉にはじまり、宮沢賢治・北原白秋へと関心を向け、ついには明治期からの児童文学の発生へと研究範囲を広げていった。同時に、童謡と少年詩の分野にも引きつけられていった。しかし、短歌とどうつながりがあるのか、われながらしばらくわからなかった。ただ、どちらにも引かれるからという理由でやっていた。

数年まえ、まど・みちおの研究にとりかかっている過程で、このふたつはおなじ根源に行き着くのではないかと考えはじめた。

ふたあつ、ふたあつ、

なんでしょか。

おめめが、一、二、

『水の涯』

爪あとのなまなまとして置かれたる青林檎ゆゑ寝ねがたくをり

幼子はいたく笑ひぬ夜の淵にありて白桃食べをへしとき

生きてゐることもあるひは徒勞かとかの日汚れて電車にありき

夜半ながら起きて一杯の水を飲むある係累を断つ思ひにて

夕光は傾きそめて体操を終へし少女ら足早に来る

忽然としてひぐらしの絶えしかば少年の日の坂のくらやみ

つめくさのしきつめられし園暗く胸を裂きたき思ひぞつる

存在の危ふきまでを問ひつめて救拔はあらぬ冬天の星

あともどりもはやかなはぬ歳月に立ちあひてこの深き傷痕

うつつには許せざるものあるゆるにぼろぼろとむく秋の唐黍もろこし

述志篇成さむ思ひのやみがたく裏日本沿ひ冬の稲妻

だだばと波打ちわれを迎へたる北の沼べり歳月無慘

夏近き孤癖は朝に洗はれて山川方夫かたはらにせり

星まとふサーカス少女空中をこげどもこげども世界に届かず

星屑を噛み当つることき雑音は「エデンの東」に踏み入りしころ

若草をあふれて朝のヴィバルディ青鞥といふ試歩の明治よ

現職に在り経るわれはいつだつて千のくやしさを後ろにぞ引く

金の魚死にたればわれ独身のごとく鋭く水飼ひ置かむ

赤々と胸裂かれたる鳩一羽死は無名にてかつは烈しき

柀の花はひそけく木机の斜光に読みし『多く夜の歌』

「檻樓日乗」

「アドレッセンス挽歌」

「美童」

ふたつでしよ。

おみみも、ほら、ね、

ふたつでしよ。

「ふたあつ」という童謡。このやさしいひびきは、文字をまだ知らない幼子たちの耳に、音声として伝わっていく。まどは、詩が「ひとりの自分が創る」のにたいして、童謡は「自分の中のみんなが創る」みたいな感じがあるという。これだ！と自分は思った。「みんなが創る」とは、共同性ということだ。それは、文字のまだでてこない、音声の文化のなかでこそ生まれてくる。そして、音声で伝え合つた時代は、文字ができてからよりもはるかに長い。

他方、短歌の魅力を考える際に、意味だけでなく韻律もまた大きな要素だとよくいわれる。その韻律は、五七五七七の形式によって生まれてきたとみなされがちだが、じつは形式発生以前、さらに文字発生以前の音声の文化を包含してきたのではないか。そこまでを射程距離に入れないと、短歌の魅力は解けてこないのではないか。

児童文学をやっていたことも、まるでむだではなかったなど、このごろやっと思ふようになってきた。近年は短歌のしごとが多くなって児童文学のほうは留守がちだが、関心だけは持っていきたい。

朝を出て夕に帰るみちのくは地の器ともまがふまで闇

枕辺の水を替へむと廊行くに身のいづくゆか鈴の音こぼる

サーカスの残しゆきたる水たまり幼らは来てこもごもに飛ぶ

大虹の下半分は地の中に潜みをるゆる言挙げはせず

雪の上のいたりて雪は姿消す天なるものはためらはぬなり

石榴せまろうを抱へ川岸過ぎ行くにひらひら君が手は合図せり

病には粥よからむとおよびもて塩まぶし食む無名は清し

うすべにの祭少女の色引きて海の方へと移る朝雲

生活の場となりたればパリさへやはやきらめかず娘の手簡

盛岡の夕顔瀬橋・旭橋唱ふるのみに心したはなぐさむ

切々とやさしかりけりみちのくの七時みなしくれやま兩山雪に擦過す

「天心」

「往還」

森閑とわれは思案す愛を売り性売り死売りあと何を売る

木にも草にも水にもたしかにことばありなかでも愛めごし木の芽のことば

根食を病む女生徒が階段で透明すぎる笑み返したり

ほうほたる見ずなりしより歳歳の川は闇夜のにほひを濃くす

てふてふと書きしむかしのかたちにて生れてまもなきアゲハ飛び立つ

みどりごは湯船にガーゼあの感触がよみがへりきて秋のてのひら

夕されば樋口一葉たけくらべ童の声も消えてしまへり

貧しくてやさしき時代ときを手暗がりゆふべゆふべは草を引くなり